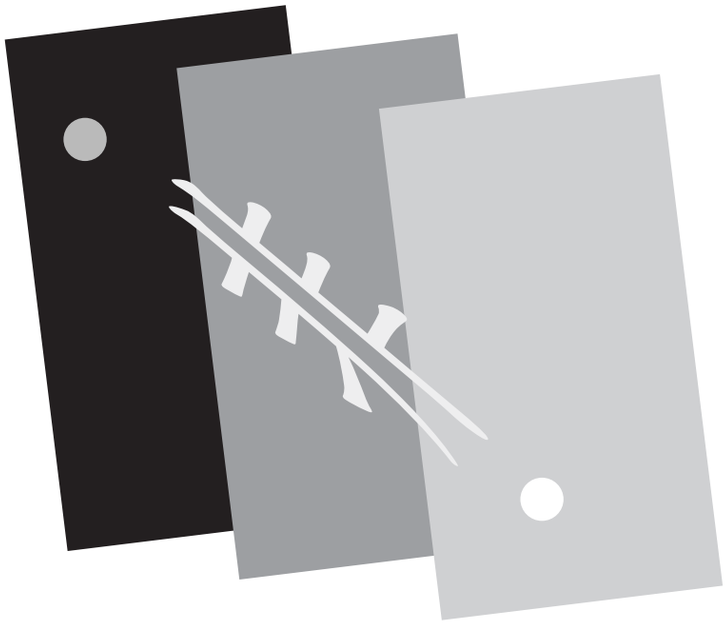
月　刊

Mélange

Vol.145



2019.07.28

詩と評論

月刊「Mélange」

Vol.145 2019.07.28

「月刊めらんじゅ」編集部

◆益田っこ通信

元（はじめ）正章

▼30号／使命（いのちを使う）〈2019.06〉

祈祷会の席で、90歳になられる女性に「あなたの使命は何か」と問われた時、「ひ孫にランドセルを買ってあげること」と答えられました。普通「使命（ミッション）」といえば、どこか「勇ましい高尚なる生涯を送る」（『後世への最大遺物』内村鑑三著）ようなイメージを抱かせますが、一人の平凡な生活者にとって「使命」とは、「あと5年元気に生きられるように」との願いが込められています。

キリスト者としての使命、教会・教区・教団の使命としての宣教・伝道のゆくえが、「わたしたちのミッションの課題」として、いつも取り上げられます。そこでなされる白熱した議論の最中に、誰かが「ひ孫にランドセルを買ってあげること」と言われれば、どのような反応が返ってくることか想像に難くありません。

私たちは改めて根本的に考え直していかなければいけないのではないでしょうか。「使命」とは字義通り「命を使う」ことです。その人にしかできない、その人でしかない〝いのち〟を、どのように用いるのか、そのことを心の中で大事に温めて生きていくことが、なによりも充実した使命を生き通すことになるのではないでしょうか。そこにはまた、当然苦労や悩みは付きものです。と同時に、人には語られない苦労が、かけがえのない喜びにと変わるのです。そうして、人はその自分に与えられた〝使命〟を使い果たすことで、次の世代にと受け継がれていくのです。「自分は自分なりに精一杯生きてきたのだ」と証しするために、一個の死があり、「いのちの旅」へと永続されるのです。死は決して人生の終りではありません。「神に栄えあれ」。

▼31号／人間とは誰か〈2019.07〉

「人間で在ることは、ただ単に存在することではありません。人間は自分の存在について内省し、その内省によって明らかにされることは、存在というものは決して自給自足的でないがゆえに、存在するためには自分自身でないものを絶えず受け入れなければならない、ということです。」「人間とは誰か。それは神の夢と計画とに陣痛を覚える存在です。神の夢は不断の創造のドラマの中では、孤独なものではなくパートナーとしての人類が居るのです。」（『人間とは誰か』A・J・ヘシェル）。著者はアメリカに亡命したユダヤ教の神学者。

八百万の神なるものを信奉する多くの日本人にとって、一神教の教理（人間は神の被造物である）はどうしても受け入れ難いものとしてあり、この日本でキリスト教が広まらないのもそのことが原因していると、よく言われるが、「私たちはありのままに自分の生を生きているのでしょうか」と問い直すことで、今一度「人間で在ること」の意義を自己検証する必要があるのではないでしょうか。それも都会の価値意識ではなく、田舎の生活感覚から信仰・祈りへともたらされる宗教性を重んじていくのならば、キリスト教の土着化が生まれてくるのではないだろうか。「今あなたはどの道を進むとも人のあわれさを見つめ　この人たちと共に……」（『書簡（大正十年）』宮沢賢治）。

益田に来て始めた読書会。次回で22回目を迎える本は、『鉄道員』（浅田次郎著）。「本日、異常なしって」「出発、進行オー」「世の中がどう変わったって、俺たちはポッポヤだ」。

〈編集部註／この「益田っこ通信は、島根県益田市にある日本基督教団益田教会の牧師である元正章氏が月間で発信しているハガキ通信を転載したものです〉

「月刊めらんじゅ」145号　目次

詩・俳句・短歌

骰子の唄／矛盾律（俳句）／偶感の迷路（短歌）……野口 裕　04
ノルマンディー　詠　詠（日独俳句）……岩脇リーベル豊美　06
波に浮かぶ食堂……大西隆志　07
ペッタンと骨と……中嶋康雄　08
ささくれ……大橋愛由等　09
六月の雨……田村周平　10
ひょうりゅうは…　……秦 ひろこ　12
ゆくへも知らぬ……にしもとめぐみ　13
煙……黒田ナオ　14

エッセイ

益田っこ通信30号／31号……元正章　03
アメリカ南部に暮らして③……モス堀渕敬子　11

連載

神戸詞（うた）あしび134「〈非場所・非寺院・非教団〉を貫いた一遍」……大橋愛由等　16

編集部だより★65／わたしが言語形成期に過ごした街は西宮市（兵庫県東部）というところ。阪急電車今津線の甲東園駅の近くに住んでいた。この周辺は、関西に転勤した来た人たちが多く住んでいた。関東圏から来る一家も多く、学校では標準語的なアクセントでしゃべる生徒たちに影響されたのだろう「関西標準語」と私が勝手に名づけているような標準語訛りの関西弁が支配的だった。そんな環境にあったから、尼崎や大阪からの転校生がしゃべる関西ネイティブのアクセントに接すると、「大阪弁や」などと言い合っていたものである。のちに神戸に住居を移したあとも、わたしの言葉は神戸弁にはならず、大阪アクセントにもならなかった。もともと「関西弁」というのも、ベネディクト・アンダーソン風に言えば、共同幻想にすぎなく実態はない。テレビをはじめとした関西一円を視聴範囲とする電波メディアが「関西弁」という仮象を作り出したのかもしれない。大阪のひととか、播磨のひとたちと語っていると、地域ごとに微妙に言葉遣いが違っていて、たとえば「播磨弁」とひとことでは言い尽くせない多様さを見ることができる。「関西弁」という呼称は、関西という地域が日本列島全体にさらされ、大づかみな言語傾向をみてとった人が差別化するために概念化したものであったのだろうか（関西弁の大きな特徴として甲種アクセントが言語学者によって定立されているが、それも兵庫県北部の但馬地域になると乙種アクセントが支配的になるなど関西一円を網羅するものではない）／今月の「Mélange」例会第一部「読書会」の話者は詩人・法橋太郎氏。テーマは〈石原吉郎の詩世界を語る〉です。（大橋愛由等記）

◆骰子の唄

野口 裕

いつの頃からかこの部屋に一個のサイコロがある
どこかの子供用ゲーム盤からはぐれたような大ぶりでなく
麻雀牌のお供のような風采もなく
ましてキャラメル入りの
キャラメルを抜いたらクシャッと潰れそうな紙箱でもなく
うっかり飲み込むと十二指腸あたりに長くとどまりそうな

一の目が赤鉛筆の芯ほどの
二の目に引っ掻いた傷のある
三の目が串のない団子のような
四の目が平行四辺形の

五の目のひとつに墨のはみ出しのある
六の目がちょっとくねっている
そのサイコロを両手で揉んで
何も占うものがないなあと
鳴き始めた蝉を聞いている

この春に死んだ人と
何年か前に死んだ人と
何十年も前に死んだ人と
そして俺と
サイコロで結べないかなあ

サイコロよ
思いっきり振るから
バレーダンサーのように
くるくる回っておくれ

◆矛盾律

野口 裕

向かい合う目を見ておらず冬鏡
市松模様に住居して風邪寝かな
せつなてきこどうかんどのじょうしょうき
春風や土に触れたる水準器
春耕の痩せたブルドッグ顔に会う
言い訳のため夢へと来た男
黙契ののち重篤の人眠る
虎杖は静かな巨木刈り残る
骰子がころり五月の大掃除
時の日やAはすでにAでない

◆偶感の迷路

野口 裕

黙読を音として聞く脳内にふっと電車の会話飛び込む
玉失せしコロコロマウス鳴きもせず空海作の池底深く
3Dアニメの主役おじいさん悲しそうな皺がつるんとしている
雲の名は光と影と風の中そんな歌あり歌の名知らず
手術台ほどではないが台所出会いの場なり蟻と歯ブラシ
陰腹とふと思いたる末期癌ホスピスの庭莨の煙
電波時計到来以降他の時計狂わせたままそちらに従う
カマキリに幾何学の影ところどころ虹噛むような三角頭
かすかなる死期の予感が口開くぶっきらぼうの暴言となり
地下鉄に自分の顔と人の顔少し見比べドアを離れる

◆ノルマンディー 詠

岩脇リーベル豊美

海猫や往来振り切りドローンとなる
Seemöwe
Kommen und Gehen
mit Schwung – eine Drohne

颱風の瞬き追想しサイレン
Eine Sirene
erinnert an den Moment
der Landung des Taifuns

水平線線分上を浮かぶ船
Je ein Schiff schwimmt
auf jeder Linie
der horizontalen Ebenen

荒海の貝集め砂浜ぷっくり
Muschelsammeln
auf rauer See –
der Sandstrand wölbt sich prall

カルヴァドスの大壜北の海渡る
Eine große Flasche Calvados
durchquert den Ozean
mit nördlichem Wasser

グラス拭く店主の目付き漁夫の長
Die Augen eines Geschäftsinhabers
wischen die Gläser ab:
Der Kapitän eines Fischerboots

◆波に浮かぶ食堂

大西隆志

昼間はわからない
外灯が点くと現れ
賑やかな音が立つ
親愛な友の私信に
貼られた食堂かな
切手が一廓を占め
浜豌豆が浮び上る
バスの発着時間は
とっくに過ぎたか
躊躇いはよろこび
あらたな扉の先へ

陽は水平線一刷け
僕らは宴に遅れる
知っている顔には
お目にかかれない
つながりは解ける
海からの風の匂い
いっときの眠りか
卓を囲んだ言語に
酔ってしまったか
単語だけが着飾り
誘いの眼差し向け

収容所までの距離
命への歩数を測る
幸福を感じた食堂
渚を歩いた日々は
何十年も前のこと
瓦礫が本当なのか
海老が皿に盛られ
ドローンからの死
果てに立つ無念へ
シャティーラの君
フォークを手にし

◆ペッタンと骨と

中嶋康雄

ひっくりかえすペッタンと
ひっくりかえされるペッタンと
今も骨があの軒先の
ほの暗い場所で遊んでいる
骨の言い分はいつもずるい
四角の端は毳立っている
そういえば丸いのもある
丸いのは古いあの子にすり寄って
指の間から未来がひたすら逃げてゆく
骨の友だちがあくびをしている
あくびの間を仏が漂う
その漂いがペッタンを取りに帰る
今も骨が待っているのは
湿気が絡まりつく体
夕飯の時間だから
みんなが帰る
空っぽに

ペッタンが数枚
落ちている
居残る骨がそっと拾い上げ
いつまでもひっくりかえす
ひっくりかえされたものが
連れて行かれる奥
まとわりつく濡れたシャツの着心地
「おへそをみせて」
ペッタンが誘う
帰らなくてもいい
呼ばれなくてもいい
ペッタンと擦れ合う骨が
発光している
キノコが
はえる
キノコが
歌う
歌を聞いたら
お腹がふくれ
お終いまでペッタン遊び
骨の間で
そらみみの蝉が鳴く
少しの間だけほんものの蝉も鳴く

その間だけそらみみの蝉が
雌の蝉を呼ぶかもしれず
その間だけ
ペッタンを持つ手にも
薄い肉が生えるかもしれず
軒を流す荒物屋はとっくに廃り
だれもかれもが引っ越して
三角頭の蟋蟀だけが
夜になると鳴いている
骨の囁き
消え入る道は
ずっと奥まで
ペッタンが
もう意匠も消えたペッタンが
ときどき
自らたたいている
裏返る
地面さえもが
消えかけている
横から口を出す大人の骨も
消える地面に溺れている
安心していい
穴の中でも

◆ささくれ

大橋愛由等

尖塔に失格している時鳥が留まっている
（〈金色にさらされたリアリズム〉言い争った蛸と蛸が凪の下に隠れていた断念が海流に乗って湾から遠ざかろうしているのを目ざとく見つけて赫い聖像（イコン）を乗せた汽船に知らせようとするのだが海流は速くて機関長も居眠りをしていたので見送るしかなかったのだけれど蛸たちの諍いの因（もと）は断念がふと漏らした海の青についての純度と深度についてだったので途方にくれることになってしまった。〈朝にしか現れない金盥〉アーケード付きの湾曲した商店街に詩人を売る店があると聞いてかけつける。13日の火曜日しか開けないという張り紙。シャッターの外に現在販売中の詩人リストがぶらさがっていた。めくると三ページ目にボクの知り合いの詩人――（この詩人は半ば病者。寡作家。具象嫌い。歩行は苦手。非と非のアンチコスモスを思慕し逐語的に生きる）価格は（もしあなたがこの詩人を購入しようと思うなら第二のファティマの奇跡が現れた時に相談にのろう）隣りの熱帯フルーツ屋が口を挟む。「売れたためしがないね」「あんたも詩人だったらここに来た明日からそのリストに載るよ」ボクはその場をゆっくり後ずさりながら蛸の吸盤の数をかぞえることでトライポフォビアが克服できるかどうか考えることにした。〈雑木林のフェティシズムは沈黙〉ささくれて舗道に落ちた風たちをひとつふたつと拾っているといくばくかの花魂がボクが発するプシュケーを解読しようとしているので「夜明け前にしゃがむと大地の擦れが歌い出すので」と言いつつT字路ばかりの街に住むようになった断念が「そろそろそろそろ」とばかり話しかけるのでボクも噛みしめるように「いとおしいいとおしい」と語り返すのだった。

◆六月の雨

田村周平

デラシネって
根なし草じゃなくて
根があっても
根づく土壌がないことだって
なんだかせつなくて
ビールの栓を抜いてみる
瓶の中では
白い花の足が
土を求めて
水の中をあがいている
ビールをウィスキーにかえても
雨は止まない

六月の雨にぬれて
山はいっせいに緑になっていく
何一つ歌わないものはないのだ
草や木も鳥や虫たちさえも
歌っている
歩いて山に
わけいっていく事ができない
ぼくのために
せめて木霊になって
溶けあってほしい
六月の雨の中でぼくは
はや七月の夢みている

アメリカ南部に暮らして―③

モス堀渕敬子

私が結婚したのが１９８９年（平成元）で、今年令和元年で結婚30周年を迎えました。

当時というか、今でもですが、私がアメリカ人と結婚したと言うと、それじゃ国籍もアメリカになったの？　という質問をよく受けました。

国籍は日本のままですが、グリーンカードというアメリカの永住権を証明するカードを移民局で発行してもらったので、それがあれば選挙権以外の権利、つまり居住や労働に関する権利が保障されました。最初に申請したとき臨時で2年間のカードがもらえ、その後10年おきに申請することになります。

以前は一度発行すると死ぬまで保障されたようですが、配偶者ヴィザの場合2～3年で離婚し、その後もアメリカに違法に居続けるケースが多かったので、10年おきという決まりに変更になったようです。

アメリカでは、敬子はいつアメリカの市民権を取るの？　という質問をよく受けました。

日本は二重国籍を許していないので、アメリカ国籍を得ると日本の国籍を失ってしまいます。うちには子供がいませんが、子供は20歳まで両親の国籍、つまりアメリカ、日本、両方の国籍を持てます。でも、私がアメリカ国籍だとそうはいかなくなります。

私は、日本に入るときは日本のパスポートで日本人のところに並べるし、アメリカに入るときはグリーンカードを持っているのでアメリカ人と一緒のところに並べるので入国検査も早く済みます。

将来的には日本に帰国する計画だったのも国籍を変えなかった大きな理由です。アメリカ人になってしまうと、日本での名前がカタカナ表記になってしまうのも悲しいです。一度アメリカ国籍に替えて、その後また日本国籍に替えることもできるそうですが、手続きに時間と手間がかかるようです。

私は一年に一度アメリカに帰ります。それはまだアメリカに自宅を残しているのと、一年以上アメリカを離れるとグリーンカードが無効になってしまうからです。そのカードがなくても入国できますが、カードを更新するのに5万円かかります。２０２２年に切れるので、その後は再申請しないつもりです。

入国審査も年々厳しくなって、今年の3月ハワイに行ったのですが、一年近くアメリカを離れていた上に、4日で日本に帰るので、グリーンカードは必要ないんじゃないかと言われてしまいました。抗がん剤治療の予定のことを言えばよかったです。

ちなみに夫は、日本で在留カードを持っていて、２０１２年以来3年毎に更新していますが、永住権を欲しがっています。そのためにはいろいろ書類や手続きが必要なので、それがこれからの課題です。

そのためにはいろいろ書類や手続きが必要なので、それがこれからの課題です。

◆ひょうりゅうは…

秦 ひろこ

りゅうひょうにのって
ひょうりゅうしてどのくらい
にしにみなみに　ひがしへきたへ
なぜかしら
とけてきえてしまわない

ひがしにながれてきょうりゅうにであう
うもうのはえたとりのごせんぞ
かぎツメをつかってきにのぼり
おまえにはおれのしそんの血がみえる
そういいのこしとびさった

ちょうりゅうにのってにしへただよい
いきついたのはりゅうさのさばく
ひゅうひゅうはいきょにかぜのふいて
ひょうりゅうはさびしい
すなにうまったほねがつぶやく

いうな　それは
わたるタカのきりゅうをとらえ
うちがわから呼ばれるじぶんのめぐり
のがれられない
これでいいんよ

いまのしおはきついきゅうりゅう
わたしのひょうりゅうもしゅうりょうするか
けれどふしぎなそうぐうはたのしくて
もういちどさばくへただよって
あのほねのものがたりをきいてみたいが

◆ゆくへも知らぬ

にしもとめぐみ

あなたの手でほどかれる
corsage※
指が腕を滑ってゆく
くちびるでたどる切ない時間

波は寄せては返し
海の仕事は果てしない
視線はからまる
永遠の一瞬

瞳の奥にあるかもしれない神秘

舟は二人を乗せて
漂う黄昏　跡の白波
もし言えない言葉伝えたら
ゆくへも知らぬ……

※Corsage　婦人服の胴着、身ごろ、ブラウス

◆煙

黒田ナオ

何もしない　何も言わない
考えない
ただ
一本の高い煙突となって
ぽーぽーと情念を
体の奥から湧き上がらせている

見上げると
鉄塔の上を
静かに川が流れて
柔らかな衣を着た人たちが
身をくねらせ
手足を長く伸ばしながら流されていく
流されながら　ずっと
何かを待ち続けているようだった

◆禅譲

法橋太郎

大臣であったかれの父は不可能な責務が果たされなかったという理由で王に首を刎ねられた。王はつぎつぎに気に入らない臣下に不可能な責務を負わせては殺していった。聖帝と呼ばれた昔とはもはや別人かと思われた。王は年老いかれは息子に王位を譲ろうと考えていたが禅譲が好いという臣下たちに反駁され以前は友でさえあった大臣たちを殺していった。

予想していた通りかれに難題が及んだ。かれは目的の捷径のために窃かに幾人かの仲間と部隊を作っておいた。その部隊は静かにこの王朝に加担する人物を掃討していった。謀反の嫌疑がかけられるまえにかれは王をとりかこんで放伐し、みずからが禅譲された王であると国民に称した。その後も旧王朝に加担する輩を殺さねばならなかった。度重なる殺戮が終わったあとかれは自分も誰かに殺されるのではないかと疑心暗鬼に陥った。

その思いはかき消しにくいものに変わっていった。国民に対しては善政を敷いたがかれはかつての仲間がいつ裏切るかと気が気ではなかった。かれは病にかかっていたのだ。仲間のほとんどをかれは殺した。かれは年老いた。かれもみずからの子に王位を譲ろうとした。その願いは果たされた。みずからの息子が王になったその日かれは息子が指揮する部隊によって静かに弑されたのだった。

神戸詞（うた）あしび

134-2019.07.28 大橋愛由等

一遍（1239-1289）について語る機会があった。7月22日（月）「姫路エクリ」読書会の場である。

この遊行の捨聖は35歳の時から16年間、故郷の伊予になんどか帰って滞在していたものの、死ぬまで諸国を旅しつづけた僧である。こうした旅は仏陀の原初的な姿に回帰するものとして評価されている。しかしその遊行の果てはすなわち〈死＝往生〉を意味した。遊行の最中にも何人か同行した者の死と直面している。

一遍のこの遊行は〈非・場所／非・寺院／非・教団〉に貫かれたという仮説をたててみよう。〈非・場所〉とは、ひとつどころに留まらず旅を続けるということである。この遊行すなわち旅というのは、「その場」にいる時はその場にあることを全肯定するわけだが、時間が立てばそこを離れるのでその場を否定するということになる。この肯定と否定を繰り返すことで一定の場所にとどまることをしない。言い換えれば「一所懸命」を否定することになる。

〈非場所・非寺院・非教団〉を貫いた一遍

続いての〈非・寺院〉。一遍は修行のためかあるいは参拝などの目的で寺院を訪れることはあるが、みずから寺という布教の拠点を構築しようとは思わなかった。作ったのは「道場」というメディアであった。後の一遍教団＝時衆が依拠する拠点は寺ではなく道場という名称だったのだが、一遍はあくまでも恒久的な布教と教団の拠点として道場を置くことは考えていなかったのではないか。いわば遊撃的な仮の拠点という位置づけだったのだろう。そうした拠点を築くこと自体、すべての事象・存在が南無阿弥陀仏という名号に帰一するというテーゼに反することになるからである。

踊る一遍たち「一遍聖絵」より

そして〈非・教団〉。一遍も仏陀もそしてイエスも自ら教団を作るという意思はなかったのではないだろうか。それぞれが説く真理、法（ダルマ）を広めることを第一義としていたので社会的規範にのっとった教団を作ることは意思していなかったであろう。一遍の場合は、後を継いだ真教（時宗第二祖）というすぐれたオルガナイザーが一遍の遺志を継ぐべく僧や信者をひきとめておくために組織化していく必要があったに違いない（一遍が尊敬していた空也も真教のような後継者がいれば教団が組織されていたのかもしれない）。

一遍を語る際に気付いたことは、一遍の師匠の師匠にあたる証空（1177-1247）の存在の大きさである。証空は法然の直弟子でありながら法然が時の政権に弾圧された時、自分は天台僧であると言って遠流されることがなかったようだ。これはすなわち証空が浄土教以外に、当時の仏教の総合知といえる天台学やその思想的背景にあたる華厳哲学を吸収していたことを意味している。こうした証空の思想的智恵は孫弟子にあたる一遍にも反映されていた。

たとえば一遍という名前を考えてみよう。華厳経に説く毘盧遮那仏の別名のひとつが〈遍一切処（へんいっさいしょ）〉であることから、一遍の「一」を数詞ではなく「一（いち）・一者」と捉えてみる。いわば一なる全者に遍（あまね）く南無阿弥陀仏という名号が敷衍することを企図した名前ととらえることができる。華厳哲学の解釈からすると、「遍一切処（へんいっさいしょ）」である毘盧遮那佛は、一切の場所に遍く有る、ということであり、そこは「理」が一切処（全存在の場）に偏在する、ということにつながっていく（井筒俊彦「事事無碍・理理無碍」）。言い換えれば「理＝名号＝阿弥陀仏＝能帰」がいつでも「事＝衆生＝所帰」に顕現する、一体であるということを意味しているのだ。

詩と評論
月刊「Mélange」Vol.145
神戸

2019年07月28日　通巻145号
発行所／月刊「Mélange」編集部
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1 2F
編集・発行人／大橋愛由等（「Mélange」同人）
maroad66454@gmail.com
定価600円(税別)